

修士論文概要

児童養護施設の入所児童との愛着形成過程にみる職員の役割認識の実態

—ペルー共和国における事例を中心に—

氏名：江口 幸

研究の目的と方法

本研究は、ペルー共和国（以下、ペルー）の児童養護施設において、児童養護施設職員が入所児童と愛着を育むことを求められる、あるいは職員自らも目指そうとする過程で生じるストレスに着目し、そのストレスを軽減する要因との関連から職員の役割認識の実態を明らかにすることを目的とする。

一般的に児童養護施設に入所する子どもは、虐待やネグレクトなどの小児期逆境体験（ACEs）を有しており、暴言、試し行動等が見られることから、職員は関係構築の過程で精神的ストレスが生じやすい。特に、施設職員は代替的養育を担う立場として、子どもとの間に愛着関係を築くことが求められるが、ACEsを有する子どもは対人関係の困難を抱えることが多く、良好な関係形成は容易ではない。

日本では、こうした虐待やネグレクトを受けた経験、いわゆる小児期逆境体験を持つ子どもや障害をもつ子どもの支援にあたる児童養護施設職員は、離職や退職が多いことが指摘されている。実際に、職員の平均勤続年数は7.7年であり、5年未満での離職が半数を占めている。これらの状況に対し、これまで労働環境の改善やバーンアウト、共感疲労に関する研究が蓄積されてきたが、職員がどのような役割認識のもとで子どもと関わっているのかという視点からの検討は十分ではない。

一方、ペルーの児童養護施設においても、入所児童による暴言や暴力、自傷行為などが見られ、職員が精神的に疲弊しやすい状況が存在している。しかし、当該施設では勤続年数が5年を超える職員が約半数を占めている。

以上のことから、職員と入所児童との愛着形成の過程で生じるストレスが、何らかの要因によって軽減されている可能性が示唆される。そこで本研究では、一般的に施設入所児童（ACEsの体験を持つ児童）との関わりにおいて、被虐待体験やトラウマに起因する暴言や試し行動等により職員にストレスが生じる状況に着目する。そのうえで、そのような状況下でも職員が日々の子どもの関わりや職務を遂行できている背景に存在する役割認識と、それを支えている社会的、文化的背景や要因との関連性を検討する。

研究方法は、文献調査およびインタビュー調査を主として用いた。

論文の構成

第1章 序論

第1節 研究の背景と問題の所在

- 第2節 研究の目的
- 第3節 研究の方法
- 第4節 論文の構成
- 第2章 世界における児童養護施設の現状と課題
 - 第1節 児童養護施設を巡る状況
 - 1-1 児童養護施設の現在までの変遷
 - 1-2 児童養護施設の現状 –新しい社会的養育ビジョン–
 - 1-3 児童養護施設に入所する児童の背景
 - 1-4 被虐待児にみられる行動面の特徴
 - 第2節 児童養護施設の職員とはなにか
 - 2-1 児童養護施設職員の資質
 - 2-2 児童養護施設の職種別にみる役割と特性
- 第3章 児童養護施設職員を取り巻く環境に関する先行研究と事例分析視点
 - 第1節 社会的養護とアタッチメント
 - 1-1 社会的養護とアタッチメント理論の関係
 - 1-2 施設養育方針に反映されたアタッチメントの視点
 - 1-3 アタッチメント対象としての施設職員
 - 第2節 児童養護施設職員の課題
 - 2-1 児童養護施設職員の離職や退職の背景
 - 2-2 児童養護施設職員への支援
 - 2-3 事例分析視点
- 第4章 ペルーの児童養護施設における制度・文化的背景
 - 第1節 ペルーの概況
 - 1-1 一般情報
 - 第2節 ペルーの児童養護施設
 - 2-1 ペルーの児童養護施設の概況
 - 第3節 ペルーの児童養護施設職員について
 - 3-1 ペルーの児童養護施設職員の部類分けと資格条件
 - 3-2 ペルーの児童養護施設職員の雇用制度
- 第5章 事例研究：ペルーの児童養護施設職員の役割認識の実態
 - 第1節 調査概要
 - 1-1 調査地一般情報
 - 1-2 調査対象施設の概要
 - 1-3 調査方法及び調査対象
 - 第2節 調査結果
 - 第3節 ペルーの児童養護施設職員の役割認識の実態にみられる特徴

第6章 全体考察

第1節 職員の役割実態と個人にとっての内的要因と外的要因との関連性

第2節 入所児童と生活を共にする職員の役割認識の実態

第3節 ある程度の時間、同じ空間で関わりを持つ職員の役割認識の実態

第4節 ペルーにおける「教育的・社会的役割」を軸とした職員の関わり

第7章 結論

第1節 結論

第2節 残された課題と展望

参考資料

論文の概要

本論文は7章から構成される。第1章では研究の概要として、児童養護施設職員の人員不足における背景と問題の所在について紹介したのち、研究の目的、方法、論文の構成について述べた。

第2章では、文献調査に基づき児童養護施設を含む代替的養護において、国際的な潮流である「家庭的養護」を推進する背景を整理した。整理するにあたって、児童養護施設の役割における歴史的変遷、入所児童の特徴、代替的養護の養育者の資質の観点から述べた。ここから、本論文において中心的存在である児童養護施設職員を社会的状況から捉えた。

第3章では、児童養護施設職員を取り巻く環境として、愛着形成に関わるアタッチメント理論とバーンアウトや共感疲労を中心に児童養護施設職員の精神的な疲労に係る先行研究を整理した。また、それらを元に児童養護施設職員が愛着形成過程に生じるストレスを軽減する要因について整理し、職員個人にとっての内的要因と外的要因を本研究の分析枠組みとして位置付けた。

第4章では、ペルーの一般情報や児童養護施設職員の雇用制度や給与、家族形態などペルーの児童福祉施設を取り巻く社会状況や政策を明らかにすることで、ペルーの児童養護施設職員の役割認識の実態に影響を与える文化・社会的背景の理解を深めた。

第5章では、事例研究として、ペルーのタクナ市において、児童養護施設で入所児童と関わる職員へのインタビュー調査内容および結果を示した。現状として、「入所児童と生活を共にする」に該当する職員は、職員の責任として習慣や価値観を入所児童に身につけさせることが中心的な役割と捉えていた。一方で「ある程度の時間、同じ空間で関わりを持つこと」に該当する職員は、自らの専門的技術の伝達や入所児童の感情的ケアに主体的に関与しており、どちらの職員も入所児童と関わる点においては同様だが、職員がどのような立場で入所児童と関わっているかによって役割認識の実態に異なる特徴がみられることが明らかになった。

第6章では、文献調査と事例研究の結果を踏まえて全体考察を行った。タクナ州の児童養護施設で、入所児童と職員との愛着形成過程においては、共通の価値観や習慣指導、技術指導、感情ケアといった職員の入所児童と関わる立場の違いによって異なる役割認識が存在していたことが示された。特に「入所児童と生活を共にする」職員は、共通の価値観や習慣指導といった教育的・社会的役割を軸とした役割認識のもとで関わっていた。また、この役割認識は、ペルーにおいて生活指導員の責任を明記する文書や、施設行事、外部講師との相互作用など、現地の社会文化的文脈に根差した実践によって支えられていることが明らかになった。また、「ある程度の時間、同じ空間で関わりを持つこと」に該当する職員は、技術指導、感情ケアといった役割認識を持っていることが分かった。これらの役割認識は、職員個人の経験や、やりがいといった内的要因と制度上の役割や施設の労働条件といった外的要因との相互作用によって自覚的な役割認識の違いが生じていると考えられる。加えて、「ある程度の時間、同じ空間で関わりをもつこと」に該当する職員が入所児童の感情ケアを担当することは、入所児童と生活を共にする職員のストレス軽減に効果を与える可能性が見出された。それは、入所児童と関わる頻度、空間の密度、時間が長く、バーンアウトや共感疲労に陥る可能性の高い入所児童と生活を共にする職員が感情ケアを分散的に入所児童との関わりの中で担うことを可能にすると考えられるからである。このように、職員自身の内的要因と外的要因の相互作用によって自覚された役割認識に基づく入所児童との関わりと、入所児童に異なる立場からの関わりが融合することで、入所児童と職員との愛着形成過程におけるストレスが生じる状況でも職員が入所児童と関わり続けることができていることが示された。

第7章では、研究目的に対する結論を述べ、本論文の意義と残された課題を述べた。本論文の結論は以下のとおりである。まず、児童養護施設職員の役割の実態については、入所児童と関わる立場によって異なる役割認識を持っていることが明らかになった。具体的には、職員は、入所児童と関わることに同じでも、その立場によって「共通の価値観や習慣指導」「技術指導」「感情ケア」といった異なる役割認識をもっていた。さらに、職員がもつ役割認識の背景について検討すると、ペルーの児童養護施設を管轄する中央省が示す文書において、生活指導員の責任には「習慣形成や価値観の内面化」が含まれていることが確認された。一方で、入所児童と関わる時間が比較的短い「ある程度の時間、同じ空間で関わりをもつ職員」においては、「感情ケア」を自らの役割として担う語りがみられた。これらの役割認識には、職員が自身の経験や知識といった内的要因と、制度、施設内行事等の外的要因との相互作用が影響を与えていた。これらのことから、愛着形成の過程で生じるストレスが、児童養護施設内において職員間で役割分担され、相互に補完されている可能性が示唆された。

本論文の意義として、児童養護施設の入所児童と職員との愛着形成過程において生じるストレスに着目し、これまで十分に可視化されてこなかった児童養護施設職員の役割認識の実態を明らかにした点が挙げられる。職員が入所児童との関わりにおいてストレスが生

じる状況であっても、職員の経験や役割を意識付けする制度が職員の自覚的な役割認識に影響を与えていることを示した点、同じく入所児童と関わる職員の中でも、比較的に入所児童と関わる時間が少ない職員が感情ケアを担う役割認識を示した点は、本論文の成果である。

残された課題としては、本論文は職員の役割認識のみからの考察であり、児童養護施設を取り巻く他の環境の要因が十分に考慮されているとはいいがたい。地域コミュニティ、病院や弁護士、他の支援機関との関わりなど社会関係の範囲を拡げてその関連性を分析することが求められる。本論文が、今後の児童養護施設職員に対する支援や代替的養護の実践を考える上での一助となれば幸いである。